

□取り上げる文章

中村敦雄(2010)「グランドセオリーとしてのレトリック」日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』459巻7号 pp.28-31

□内容

我が国の国語科教育において、レトリックは「コンポジション (composition) や分析批評 (new criticism) といった、主としてアメリカにおいて十九世紀以降誕生した、レトリックの一部分を分断して実用的整序を施した学」(p.28)を「間接的に引き継」(p.28)ぐ形で輸入された。今後は、この「分断独立して成った実用的な学と、グランドセオリー(広汎な分野で適応可能な一般理論)としての双方への目配りを心がけたい。」(p.29)

また、「近年日本でも注目されているメディア・リテラシーやPISAの読解リテラシーは、いずれもその基礎において社会構成主義を踏まえており、レトリックと通底した言語観が力強く拍動している。「型」というアプローチによって諸学の表層をとらえてなぞるだけでなく、理論的な立脚点まで掘り下げた研究が必須である。」(p.31)

「私たちにとっての次なる課題は、グランドセオリーとしてのレトリックを踏まえつつ、現代的な課題に応える新たな可能性を追求することにある。」(p.31)

□修辞(レトリック)の捉え方の疑問

言葉で表現する際、修辞から論理を独立させることは不可能である。論理構成は三次元的な構造であるのに対して、文は平面でかつ一方向の線状構造である。三次元的構造を水平・線状構造に再構造化する行為に修辞は関係する。「グランドセオリーとしてのレトリック」とは、具体的に修辞のどのような様相を表しているのか。

また、修辞は中村(2010)が示すように、「発想」「配置」「表現法」「発声」「記憶」の五つの領域がある。「発声」は読み書きにどう適応されるのか。「広範な分野で適応可能な一般理論」なるものが果たして存在するのか。また、どの程度の「広範」さを求めるのか。「現代的な課題」に応えるのにレトリックが求められるものは何か。

□国語科における修辞指導への疑問：文章内容を超えて

■「疑問・反語」で説明する古典文法

古典文法において、「や」「か」は「疑問・反語」の助詞だと説明されるのが一般的であるが、なぜこんなややこしい、層が異なる説明の仕方をするのか。疑問は意味論的に説明されているのに対して、反語は語用論(言語行為論)的な説明である。また、反語は修辞疑問の一種であり、なぜ修辞疑問から反語だけを取り出して疑問と並べ指導するのか。

自身の学習者経験と、大学四年間の塾講師経験からはどうも不適切に思えてならない。

■修辞を和歌の技法としか認識させていない国語科教育

1995年に香西秀信の「反論の技術」が刊行され、2008年には「反論の技術・実践資料編」という問題集が刊行された。この問題集は滋賀大学教育学部附属中学校では一時期教科書に採択され、国語科の授業で修辞学の知見(〈類似からの議論〉)を活用した作文指導が行われたそうである。

しかし、これは稀な例なようで、自身がこれまでに関わった児童・生徒は、修辞といえば和歌で習ったもの程度の認識しかないようであった。

また、比喩は習っても、比喩がわかりやすさや説得力をもつのかということは意識して

おらず、「まるで～よう」の語があれば直喩であるという判断をしていた。

「まるで～よう」という語は和歌で使われないため、学習者は比喩を和歌以外でも学んでいるとは思われるが、学習者が整理出来ていないのが現状である。

現在の教育が社会的構成主義を踏まえているならば、蓋然性を検討する議論の指導は必須である。であれば、香西秀信が生前行っていた研究はその大きな支えとなるはずである。

加えて、香西秀信が生前教科書の編集に携っていた東京書籍『新しい国語2』には「「正しい」言葉は信じられるか」という、修辞における「配置」「表現法」の入り口を説明した文が掲載されている。しかし、東京書籍だけである。

近年重視されている批判的思考という思考過程には、修辞の知見が多分に活用されているはずであるが、何故かそんな指導はあまり見聞されない。

■喩えと議論

我が国は民主主義国家であり、民主主義で最も重視されなければならないのは議論である。ルソーが間接民主制を批判したのは国民が直接議論に参加できないからである。我が国は間接民主制であり、それ故に民主主義は多数派が尊重されるという誤解が国民の間で蔓延している現状があろう。民主主義社会を生きる国民を育てる為の学校でさえ、教師は安易に多数決で物事を決める学級経営を行いがちである。非常に不愉快な現実である。

また、議論は公正で、素直に、論理的に行うべきであると考え”良心的な”人がいるようである。しかし、国語科で指導すべき議論は、言わばヴァーリトゥードであり、詭弁も<虚偽>も許されるべきである。そもそも、小学生・中学生が詭弁や<虚偽>を排して議論を見つめられるほど、彼らの能力は高くなく、言い換えるとそれほどに難しいのである。

そして、議論の方法に、香西秀信は<類似からの議論>を提唱する。

第二回の本演習授業で、私が舟橋教授の子どもが好きだから教師になるは、患者が好きで医者になると同じで理屈として認められないという考えを紹介した際、辻さんが浮気をした人が主食の他におかずも欲しくなるという喩えで言い訳をするのと同じで納得できないとして舟橋教授の考えを棄却した場面があったが、これは<類似からの議論>と<「譬え」による議論>であり、香西(1990)「「譬え」による議論の修辞学的分析」と香西(1992)「正義原則と類似からの議論」を読めば、この議論における両主張の妥当性の高さは自ずと知られる。

香西秀信の影響で、宇都宮大まわりでは修辞の指導が盛んに行われているようであるが、全国的にみて修辞の指導は低調であろう。香西秀信の一連の研究は、「グランドセオリー」とは言えないのか。